

虚の符

ソラのイカダ

洪水企画 2016.3.10

http://www.kozui.net

神泉 薫
天地位
その中空に正座し
或は屹立し
今日は花を 垂直に放り上げ
明日は花を 地に埋める
『梅は来年までの宿題』

花との闘いはひとときも休む間もなく
暮れゆく陽を浴びて
あふれんばかりのミモザの黄に埋もれる
指や鉄が空間を踊れば
花びらからこぼれ落ちたイノチが怪しげに変化する
春夏秋冬
幻も美も夢も
一筋縄ではいかぬ反世界
己の軸を大地という名の剣山に刺して
男は
曼珠沙華の
カーネーションの
滅びゆく宿命を負った真つ赤な血を振り仰ぐ
闇に満ちた険しい創造の谷で
まばゆいばかりに
光射す
いちりんの白梅
その開花を
その一瞬を
母の胎内で水を覚えた日から
永遠に続く宿題として
今日も明日も明後日も
彼岸まで
生け捕り続ける



花鳥草国 海壑 今日子

のどもと／くるぶしに、さきまつて、おうこく

きんぎよりに、おもい、ころがり。草たちのねむり。ま
だ、だれを、みあたらない。とびたつ鳥の、ついばむ
けしきへ。だつて、草まкруつていうじやない、あしも
と、すぐわれ、めりこむそくとに、ちいさなきげび、か
くすやうな。そんなばしょ、かも、さがしましょう。
けしんみなみに、やきつばしい
花をひとり、わたしを、つれて、あいにゆく。まだ、さ
きません。だんだん、あたらしく、なりますか。ゆるい
やくそくが、こちらです。そこに、はがいじめ、なんか
は、けつして。小鳥ですか、いえ、あれは花芽。もう
すぐ、かおつて、ふるさをまとい、たびだつていしょう。
こいしのように、うすぐ／なる。のです
えんきよりに、ばかり、枝、かかげて。もう、そこに、
いきているの、つれないねえ、ずつと、いたきも、たま
にはする。ころころと、なきました。やつぱりいな。
おおきだつたら、じゅうぶんで、みちるべ、おい
で。たわんだ、そのさがが、ずいぶん、ひさしい。

ああ、はばたき、だつたらきつと、のみこめません
うまれそだつた、あの鳥の、きおくをたどる。かんけい
なかつたかも、とおもいを、はさみ、ひらいていた、
いつのまにか、花のてまて、空に、あかるい。ぼつかり、
あいた、かげのまつりだ。むこうに、やくそくがあ
りました。そんな、ふみしめ、またげば、よかつた。
こいし、おうこくを、なりますね

草の、空の、ずいぶん、あおさ、しました。たどるほ
どに、ばしょも、うごく。から、まつて、いえ、もどれ
ばいい。草をまкруらに、日はしに。だんだん、ひめい、
おもいでしょうか、ゆつくりと、そんな、鳥が、花をつ
む。そくと、ずらし、ひがはに月で、さがす、ほういだ
のどで、ふるえる、いちりん、いちわ、あるきましよ

散策路 久野雅幸

草むらからあらわれた
木の幹を駆け上がる
高い枝の上から
はねた
空に
うつつらと
昼の月
*
町の中木が立っているのか
森の中に町があるのか
通るたび
疑問に思われる
場所がある
宅地に囲まれた
狭い場所に
数本の木が立っている
それだけの
場所なのだが
*
休む石――
と呼ばれる石が
住宅地の中を行く
人通りの少ない道の
道端の少ない道の
大通りから外れた
細い道と細い道のぶつかる
丁字路に
『休息』
という
名前のバス停留所がある
屋根付きの小さな待合いのある
国道沿いの停留所――
東に向かうと
道は
しだいに
峠道に
なっていく



笹舟に乗る 酒見直子

はじまりは
水のコンコン湧くところ
河のつてぶん
この両手で
笹舟をつくる
青々として活きがよくて
おいしそうで真つ直ぐな葉を
笹からもらい
ひと折り
丁寮に折る
（折るという字は
折るに似せてね
世界に生まれた
たつたひとつの笹舟を
静かな港の形をした手の平から
そつと流そう
心に乗せて
私の河に
おわりは
河が行きつところ
笹舟がほどこ
心がサラサラ溶ける海
（海の大さなへその緒があるよ
そこでわたしは思い出す
私であつたときのことを
憎む人や憎んだ世界があつたことを
愛する人や愛した世界が
海へ流れつたとき
知るだろう
それもわたしであつたこと
わたしはおわり
そしてはじまり



(The Power)

小島きみ子

*月曜日からエクササイズに通っている。春つぼくなつ
たばかりなのに寒が降つて、きよくて二月も終つてし
まうので、なんだ、かんだと言いながらエクササイズに
行く。月謝も高いので、一ヶ月上の同僚と休んじやだめ
よ、と励ましあつている。きょうは心拍数が上がつてい
る。マシンとボードの使い方がだんだん判つてきて、珍
しく汗をかきながら壁を見ると「The Power」とある。
どんな（力）や（能力）だろう。

*これは、ニーチェが考えたことだが、（エス）が考え
る思想というものはそれが欲するときだけに私たを訪
れるものであり、（我）が欲するときを訪れるのではな
い。だから主語（我）が述語（考える）の条件であると
主張するのは、事態を偽造していることになる。（エ）
が考えるのは、一つの仮説、一つの主張に過ぎないと、する。さ
らに、厳密に思考する人々の力で、地球の残滓はついに
取り除かれたとし、（エス）は古く貫き（我）が揮発し
て生まれたものだと断定する。初めて（エス）に気
づいたニーチェは流石だ。壁を見ると目が廻るので壁を
見ない。

*壁が白すぎる。一九〇〇年ごろ、イェイツは個の精神
の下で息づいている類の記憶を（天）に託しと呼び、
それをよび覚ましてくれるような諸象徴を操作すること
で絶対者を追及した。これらの象徴は後代のユングによ
る原型になぞらえることも可能。ジョイスは異なった時
代の諸象徴を同時に呈示することによって、同じ目的
を果たそうとしていた。時代を異にする人や場所を故意
に操作することで、永遠の印象を生み出す。この
ことは、エリオットやパウンドによつても実践されて
いる。ホイトマンの僕自身の歌はこんな風におもしろ
い。（これはあらゆる時代のあらゆる人間が考えたこと
だ。僕の独創ではない。これが僕のものであるほどに君
のものでなければそれは無だ。無に等しいものだ。これ
が謎でありまた謎解きでもなければそれは無だ。ふふ。
謎だらけで目が廻るだろう。

*キーツの小夜鳴鳥についての考察。ページに付箋があ
るので、重要と思つたのであろうけれど忘れていた。オ
ードで最も問題になる箇所は、終わりから二つ目の（ス
タンザ）にある。偶然に生まれ死すべき運命の人間が鳥
によびかける。（いかなる時代の飢えた人間もおまえを
踏みつたりしない）この言葉の意味は聖書的に深い
だが、いま、「耳にしている鳥の声は遥か古の午後、モ
アブルーツがイスラエルの岳で聴いたのと同じ声だ」モ
アブルーツは、イスラエルが故郷に帰り、終末が近づ
いている時代。それはまさに今の時代（The Power）
の文字がぐるぐる廻り（大いなる記憶）を呼び覚ます。
同僚が肩に手をかけて囁く。（あしたは休むのでよろし
く）うん。彼女は私が彼女よりずっと年下だと思つて
いるらしい。

【これが実物大の偶然の仕業であれゴムボートは……】

たなかあきみつ

これが実物大の偶然の仕業であれゴムボートは思つまる
ような（砂の水母）のための急造船、今世紀のレスポス島の
埃の蔓延するソフトオーカスの突堤だ、反転して廃館まぢかの
海辺の映画館の五里霧中でSynchroをじゃらじゃら打ち鳴らし
茄子とトマトを串刺しにした有刺鉄線を挿け未使用の消火器を
とある老舗ホテルの車寄せの対角線上に投げ出された下股の
放置を推奨できる破傷風、見えない泥によるその未開封の腫れま
うおまえは正視できないところかそれを浸透できそうもない眼珠
この際標準的術式のスクラッチを消しても消し屑は残る
とりわけ雨模様は午後はこの水槽のガラスの内側で窒息しそ
う

この空間の表面上のsamnagのざらつき、ゲバラ葉巻を啜えて
やおら空想するゲバラ以後の肥大化デブリのケリラぶり
すかつとした後ろ手によるカフエのエプロンの紐の解き方結び方
なんだか得意げにその横顔の媚態をみせながらスチームアップで
乗りこなす南洋の波乗りもどきの巧みな指さばき

年嵩のいつた口がケチャップへの懐郷をいきなり所望するのは
ゼブラ仕立ての直滑降、まだアイスバーン化した訳でもないのに
延焼中の3Dレデブリやデトリタスやデコンパルの果糖にたかる
鱧の群れとして気紛れな浮遊物体にあらず、ひとしきり艦の闘つて
いじけて寝ころぶ猪のうんともすんとと言わぬ秋日のふて寝である
動物園でさつそうと黄緑の水浴びをするのが灰と黒の糞であるのに
対し、いらいらとコロ位置で思いきり体軀を伸ばすチータ（書豹に
ワープして）縫いぐるみに類似した前者は水槽でパンヤパンヤはしゃ
ぎ、いやはや後者は乾熊肌的女帝みたい気球やフライイングページに
安置される、FM局でよくやく放流されたベートルヴェンの交響楽
バルセロナ産のボクジャキイのジャンキイぶりに鑑み

の耳を啜えろ、鳥の嬌声よおまえの羽根ほどは華麗ではない
自動人形の折れた首のように片手で未完のシニョン結いにいそしむ
窓際でのえんえんと反復される膝蓋反射のように
サグラダ・ファミリアのジャーク際立つ空間際のカミソリまげ
バルセロナ産のボクジャキイのジャンキイぶりに鑑み

地面すれすれでもつれた病名の地誌を案の定除籍せず
夜間の黒鳥のひかがみを追跡せよ、あのガウディの必ずや
自署名Gの孕むノブ、繰り返し長身のキース・ジャレットのように
後ろ姿を逐次更新する（Breve Breve Blackbird）とマンホールの蓋を
やんやの象牙焼成ブティックの影をおとす虚実の遠近法とともに
思はず驟雨のネジが抜ける、（年輩の女が、傘を上げようとして、
トランクの形をした緑色のプリキの小箱を落とす、
波止場の敷石にぶつちがって箱はつぶれ、蓋ごとび、底がぬける、
金目のものは何ひとつない、
大切なものだけだ……）路上でもつばら傘の描く放物線だけ。

【補註】『砂の水母』ニシニル・レリスの詩集『編纂』に収録の詩篇『砂の蓋蓋』
からの引用。
（年輩の女が、傘を上げようとして……）ニジョゼ・サラマゴ『リカルド・
レイスの死の年』岡村多希子訳・二〇〇二年彰流社刊）からの引用。

ダミー 二条千河

傷つくために生まれてきたから
表情は初めから持たなかつたり
フロントガラスを突き破つたり
エアバッグに埋めたりする顔面に
涙なんて要らないはずだ
疾走するセザンの中
必要なのは高感度のセンサーと
ヒト並みの体積と体重と
ヒト並み外れた頑丈さと
あとは少しばかりのフエッソンセンス
血だの脂肪だので汚す心配もないので
真っ白なシャツだつて気兼ねなく着られるし
カメラ写りはそれなりに重要だ
もちろん車載カメラで記録される映像を
彼自身の目で確かめることはできないが
他の誰かがそれを見てああだこうだと言うだろう
疾走するセザンの中
しかし今日はグレイのシャツを着せられて
模範的な姿勢で固定されたハンドルを握る
バックミラーに映る後部座席の家族も
喉ひとつない試験場の路面も
起こるべくして起こる事故も
何もかも紛い物 だが
彼がその身に負う傷だけは
紛れもない本物だ



étude 四脚舞 66/85

池田 康 (66)

壊れたという
壊れたのなら直せばいい
直せないという
直せないなら捨てればいい
捨てられないという
捨てる場所がない
捨てる方法がない
ならばそこに置いておけ
置いておけないという
毒をまき散らす
爆発する
危険
どうすればいいのだ
忘れろ
ないものと思え
壊れるというのだ

（85）
黒猫の瞳は金
身構えて狙う虚空の
囀
羽の自由
黒猫の一日は神も知らない
黒猫もそれがなんなのかわからない
しかし金の瞳は
なんでも知っているかのように光る

黒猫は金の瞳
その光はなんでも知っている
しかし自分の黒い部分については
なんにも知らないのだ
身構えて狙う虚空の
風
風の現世を編集する
金の瞳の瞬き

